

## 家政学部生への英語指導についての一考察

著者	清水 明子
雑誌名	共立女子大学家政学部紀要
巻	65
ページ	59-63
発行年	2019-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1087/00003241/">http://id.nii.ac.jp/1087/00003241/</a>

# 家政学部生への英語指導についての一考察

Examination on the Teaching Strategies of English for Home Economics Majors

清水明子

Akiko SHIMIZU

## 1. はじめに

グローバル化に対応した教育改革の一環として、小学校で2020年より英語が教科となり、中学校においても英語による授業が行われるなど、学校における英語への取り組みが一層進んでいるように見受けられる。一方、大綱化以降自由度が増した大学のカリキュラムでは、家政学部の外国語科目が必ずしも専門科目と関連した形で設置されていない現状が浮かび上がる。筆者が2005年に行った全国主要大学の家政学部の語学教育の調査では、外国語科目の卒業要件は、8単位から6単位が最も多く、中には4単位のみという大学もあった(清水, 2007)<sup>1)</sup>。今回、首都圏の女子大学数校の英語のカリキュラムを再度比較した結果も、4技能(リスニング・スピーキング・リーディング・ライティング)を総合的に高めることを目的として、基礎教育の一部と位置付けられている状況は以前と変わらない。伝統校においても、家政学部では語学の卒業要件が最大8単位にとどまり、自由選択科目としての履修も他学部より選択の幅が狭い学校も見受けられた。さらに、基礎教育の英語では、学生の習熟度に合わせたレベル別クラス編成がなされ、「リメディアル」と一般に呼ばれる基礎的事項の再点検とその定着を中心据えた授業を設けている大学も少なくない。このような状況では、学生が専門科目の学習に進む年次になっても英語の有用性を認識しつづけ、学習を継続するには困難が伴うであろうことは想像に難くない。

本研究では、日本の学生を対象とした英語学習の動機づけに関する調査のサンプルを分析することで、英語が専門科目の学習の重要なツールとなりうることを学生に示し、継続的かつ自主的な学びを促すため、家政学部の日々の教育の枠組みの中で、どのようなアプローチが可能かを探ることを目的とする。

## 2. 動機づけの型と段階

### (1) 統合的動機づけと道具的動機づけ

第二言語教育における動機づけに注目した先駆的研究としてGardener (1985)<sup>2)</sup>によるものが挙げられる。Gardenerは、学習者が学ぶ理由を志向(orientation)という概念から分析し、「道具的(instrumental)」と「統合的(integrative)」の2種類に大別した。「道具的」動機づけは、志望の学校に入学したい、あるいはよりよい職につくためといった、比較的短期で具体的目標に到達することを重視するものである。一方、その言語が使用される社会や文化を理解し、それに同化するための学習と位置付ける志向は、「統合的」な動機づけとみなされる。Gardenerらの研究は「統合的」な志向に導かれて学習を進める学生の方が「道具的」志向の学生よりも習熟度が高いとの仮説に基づく。しかし、日常生活において英語の使用の機会が限られている日本において、「統合的」志向のみで学習を進めている学生の数は相当限られることが経験的にも推測される。

本学の基礎教育科目で、日本人教員が担当する「英語Ⅱ」(リーディング・ライティング)

のようにすべての学部 of 学生が同じ教室で学ぶクラス分けでは、例えば、管理栄養士を目指す家政学部生と国際機関への就職を望む国際学部生とでは、英語の授業そのものの重要度から学びたい内容や方略までが相当に異なる。栄養学の分野の最新の知識を英語で諸外国の情報源から得ることは有意義であろう。しかし、職場での日常の業務で、コミュニケーションのために英語が必須であるという状況は、少なくとも国内において多いとはいえないだろう。一方、国際機関に勤務する者にとっては、専門的な内容を処理できるだけの高度な英語力を有することは最低条件の一つと言える。したがって、指導の対象となる学生が現在英語という言語とその学習を、どの側面から見ているかを理解するため、この視点は有効であると思われる。

## (2) 自己決定論に基づく動機づけの段階

1990年代以降、外国語学習における動機づけ研究は、心理学の理論に根拠を求めようになるが、その中で特に今日まで多大な影響力を持つのがDeciらによる自己決定理論である。Deciらによれば、自己の行動を自ら責任をもち決定する「自立性」、自身の能力や自信を示したいという「有用性」、そして他者と社会との連携を求める「関係性」の3つの欲求が人には備わっている。そして、これらの欲求が満たされたとき、「内発的動機づけ (intrinsic motivation)」が働き、その人はある行動を選択しそれを行う (Deci & Flaste, 1995)<sup>3)</sup>。内発的動機づけが極まった形は、活動そのものを楽しみ感じ、それ以外に報酬を求めない高度に内在化されたものである。

Deciらは、また、学習者に具体的な行動を起こさせるには、外部から働きかける力も大きいことを認識し、それを「外発的動機づけ (extrinsic motivation)」と呼んだ。すべての学生が「内的動機づけ」に突き動かされ、自律的に学習を進めることは理想だが、現実には、単位取得や資格試験のためといった具体的な目標を

限られた時間で達成する必要がある場合など、自身の専攻分野の学習にすら時に抵抗感を持ちながら学習を遂行していく姿を目にすることも珍しくない。また、親や教師からの期待や、将来希望の職業に就くために必要な知識や技術を習得する目標と、程度の差こそあれ外部要因の影響を排除して学生の学習の軌跡を語ることは不可能である。Deciらは、さらに「外発的動機づけ」を、自己決定の度合を物差しに「内発的動機づけ」との距離において4段階に分類し、動機づけが様々な要因によって柔軟に変化することを明らかにした。<sup>4)</sup> 外的調整 (external regulation) の段階において、学習を推進するのは「必修科目だから」、「期末テストで落第点を取りたくない」など、ほぼ外部からの統制のみといってよい。しかし、「英語の力が他の学生に劣るのは恥ずかしい」という気持ちが芽生えた場合、その学生は、他人の目という外的圧力が依然強いものの、自己内調整がみられる点で、取り入れ的調整 (interjected regulation) の段階に入ったといえる。自己決定度が高くなると、同一視的調整 (identified regulation) のレベルに入ったと判断され、より純粋に内発的な動機づけに近い段階に到達したとみなされる。ここでは自身が希望する進路においての英語の重要性を認識し、より高次の視点から英語の学習をとらえ、自ら進んで学ぶ姿勢がみられるようになる。Deciらは外的調整と取り入れ的調整を「統制的な動機づけ」、また同一化的調整と内発的動機づけを「自律的動機づけ」に分類し、学習者が統制と自律のどちらにより近い観点から特定の学習の内容や活動をとらえているかを測る尺度とした。

## 3. 実践的研究にみる日本の大学生の動機づけ

高梨 (1990, 1991)<sup>5) 6)</sup> は、教職志望の学生へのアンケート調査から、「統合型」と「道具型」の出現の仕方と学生の成績との相関関係を詳細に分析し、これら2つの型が簡単に割り切れない点を指摘している。習熟度の高い学生は「統

合型」の特徴を持つ傾向にあり、一方、成績下位の学生には「道具型」が多い傾向がみられたと報告している。これは、英語学習の必要性の認識の差より、実際の取り組みによる影響が学力という形に表れたものであり、成績上位者はより熱心に取り組んできた結果、学力を高め、さらに英語が使用されている国々の文化などにも広く興味を示すようになったと分析できるとも高梨は述べている。研究対象が、教育の価値をおそらく他の専攻分野の学生より重視していると考えられる教育大学の学生という点、また検証が行われたのが現在より進学率も低い1990年代初頭であることを考慮しても、大学入試を終え、日常生活のなかで頻繁に英語が必要となる環境でない場合、成績下位の学生たちにとっては具体的な目標を持ちつつさらなる向上を目指した広い視野から学習を継続していくむずかしさを示しているとも考えられる。この調査が行われた当時の大学生の平均的学力を考慮した場合、学生間の語学の習熟度の差がさらに広がり、価値観の多様化も加速度的に進む現在にも似た傾向がすでにみられるのは、学習態度と関心が動機づけとどのように関連するか、その影響のあらわれ方に一定の普遍性があることを示唆するものであろう。

岡田(2010)<sup>7)</sup>による小学生から大学生まで動機づけの構造的変化を欧米の論文を中心にメタ分析をした研究は、対象を語学に限ったものではないが、学習環境と動機づけの関連性が、文化の差を超えて共通性を持つ部分が多いと指摘した点で興味深い。小学校時代は、親や教師などからの指導で取り組む統制的な動機づけと興味・関心に基づいて進める自律的動機づけが明確に分かれる傾向にあり、また、試験などの外的評価の影響が比較的弱いいため、純粹に内的動機づけによって学習する場面も多くみられるという。中学・高校に進むと、他者と自己の学力差や成績についての知覚が顕著になり、内的動機づけを持ったとしても内面的な不安や外的な統制が強く存在する傾向がみられる。大学に

進むと、他者と自身との比較や競争がそれほど重要視されなくなり、興味や重要性を根拠とする自律的学習習慣に密接に関連した動機づけが明らかになる。しかし、大学生にとっても、学習は単位取得や就職活動を有利にするための手段として作用し、外からの作用が動機づけの一部であり続けることは否定できない。この研究から、成長の過程で自分なりの価値判断の尺度がしだいに確立し、自らが置かれた学習環境と自身の価値観との兼ね合いで動機づけも異なる様相を呈するようになる過程が見て取れる。

大学1年次と2年次学生の英語に対する鈴木らの学習動機の比較研究は、すべての学生が、成長するにつれてより自律的な動機づけによって順調に学習の成果を上げていくのではない様子を明らかにしている。<sup>8)</sup> この研究はDörnyeiら<sup>9)</sup>が提唱する理想自己(ideal self)と義務自己(ought-to self)の観点からのアンケート調査を教職志望の学生に行ったものである。理想自己とは、自分が将来なりたいと思う人間像であり、その目標達成のための学習はおのずと自律的動機づけに裏付けられたものとなる。一方、義務自己は、自分がこうあらねばならぬという考えで描く像であり、自律的より他律的動機が密接にかかわっていると考えられる。鈴木らは、学生の回答の傾向から、1年次よりも2年次の学生の方が英語に対する関心が薄れ、さらに不安も大きくなっている可能性があるとの観察している。さらに、同じ教職希望の学生でも、特別支援教育の課程の学生の方が、初等・中等教育の教員養成課程の学生よりも、「卒業単位取得のため」など、英語を「道具的」に位置づける傾向が強く、一方、国際的な仕事に就くために英語の学習は有意義であるという「統合的」な動機づけがやや低いとの指摘もしている。

#### 4. 家政学部における英語指導の課題とその解決に向けて

上記の研究例に示されたように、動機づけが様々な要因によって変化し、学習に少なからぬ

影響を与えることは明らかである。「自律性」、「自主性」は、人間形成の場としての大学において重視され、学生に対する指導の場で繰り返し現れる文言である。しかし、大学生といえども、長期的視野に立ち、将来の目標実現のためにより有効な学習の方法を日々実践しているとは必ずしも言えない様子がうかがえる。これらの研究に引用されている学生の回答から共通して読み取れるのは、「コミュニケーション力」という言葉に集約される英語の総合的な運用力の向上を学生が望んでいることである。筆者が本校の1年次の学生に行ったアンケート調査<sup>10)</sup>でも、上位レベルの学生は、所属学部の別なく英語の学習に対して全般的に前向きな姿勢が見られた。しかし、学習の目的についての質問には、「会話」、「英語を使う職業」など一般的な回答がほとんどで、大学時代に達成したい英語学習についての目標、そしてその目標に至る過程での方策がまだ具体的に考えられていないことが読み取れた。

家政学部の学生にとって語学を継続して学習していく上での別の課題は、卒業要件を満たす単位を修得したのち登録できる語学領域の科目が他学部比べて少ないこと、資格取得のため専門科目の学習に専念する必要から、TOEICの受験準備など就職活動の対策以外は、語学の学習を中断せざるを得ないことが多い点であろう。

このように日常英語に頻繁に触れることが他学部生に比べて少ないであろう多くの家政学部生にとっては、「道具型」そして「外的」な形でも、動機づけの維持を目的とした英語の資料を専門科目の授業や生活の各場面において提供し続けることは、学習の継続という観点から試みる価値があるのではないだろうか。

1年次の全学共通科目の授業において、通常のテキストの読解とは別に、ウェブサイトなどから興味のあるトピックを論じた英文を自由に選ばせ、その内容の要約を発表させる活動を取り入れたことがあった。学生の選択したトピ

クの中には、時事問題から話題の映画の解説などの一般的なものに混じって、フランク・ロイド・ライトの建築、アメリカの幼稚園、世界遺産としての日本食など、家政学部生が専門科目の授業で学んだと思われる知識をもとに選択したと判断されるものも見受けられた。さらに、プレゼンテーションと内容の要旨をまとめる課題からも、学生の内容理解が確かなものであることが確認できた。このことから、語学の授業で英語の語彙や文法などの基礎学力の強化をしつつ、早い時期から専門科目の授業でも英語で書かれた関連の資料を配布したり、動画を字幕付きで視聴したりするなど、個々の学生が授業外で利用できる教材が広く存在することを知らせることも、継続的学習を促すために効果があると思われる。吉住 (2014)<sup>11)</sup> は、英語の授業には「真正性 (authenticity)」が高いことが、動機づけに「重要かつ効果的」であると、大学生に対して行った授業評価アンケートの結果をもとに述べている。専門科目の教員や助手による関連資料の提供は、家政学部生にとって教材に真正性を持たせることで、英語の学習の有用性を認識してもらう有効な手立てとなると考えられる。

## 5. まとめ

専攻分野ごとに興味が多岐にわたる個々の学生に対して効果的指導を行うには、各人の置かれた環境を見ることも重要であると今回動機づけに関する論文の調査で再確認された。大学での学びが主に教室という場で行われ、課題や試験という評価が必要な限り、学生の動機づけから「道具」や「外的」という側面を切り離すことはできない。そのことを踏まえて、なお「道具を超えた英語学習の価値認識」<sup>12)</sup>を指導することが大切との指摘は重要である。それぞれ学生の学びの過程で、その成長を見越した長期的視野から学習法や教材を提案し、彼らの自主性を導き出す道を今後も探ってゆきたい。



### 引用文献

- 1) 清水明子：「ESP教授法に基づく英語教育の現状と課題」, 共立女子大学総合文化研究所紀要, 第13号, 118-125, (2007)
- 2) Gardner, R.C. : *Social Psychology and Second Language Learning: The Role of Attitude and Motivation*, Edward Arnold Publishers, London (1985)
- 3) L.E. Deci and R. Flaste: *Why We Do What We Do: the dynamics of personal autonomy*, Putnam, New York, (1995)
- 4) R. M. Ryan and E. L Deci : “Intrinsic and Extrinsic Motivations: Classic Definitions and New Directions”, *Contemporary Educational Psychology*, 25, 54-67, (2000)
- 5) 高梨芳郎：「外国語学習における動機づけの役割」, 福岡教育大学紀要, 39, 59-73 (1990)
- 6) 高梨芳郎：「英語学習における統合的動機づけと道具的動機づけの役割」, 福岡教育大学紀要, 40, 53-60 (1991)
- 7) 岡田涼：「小学生から大学生における学習動機づけの構造的変化 - 動機づけ概念間の関連性についてのメタ分析 -」, 教育心理学研究, 第56巻, 第4号, 414-425 (2010)
- 8) 鈴木渉, Adrian Leis, 安藤明伸, 板垣信哉：「大学生の英語学習に対する動機づけ調査 - DörnyeiのL 2 motivation self system に基づいて」, 宮城教育大学国際理解教育センター年報, 第6号, 34-43 (2011)
- 9) Z. Dörnyei : “The L2 Motivation Self System”, Z. Dörnyei and E. Ushioda (eds.) , *Motivation, Language Identity and the L2 Self*, Multilingual Matters, Bristol, (2009)
- 10) 清水明子：「英語と他言語における初年次学生の動機づけ：パイロットスタディー」, 共立女子大学家政学部紀要, 第59号, 27-34, (2013)
- 11) 吉住香織：「Motivational strategiesと生徒の英語学習意欲：学習者はどのような指導を動機づけに効果的と考えるか」, 國學院大學教育開発推進機構紀要, 第5号, 37-60 (2014)
- 12) 前掲6)